

知内ソーシャルクリニック

町内の教育資源が集約される重要な機会 ～知内高校「地域創生学習」の取り組み～

北海道教育大学函館校
准教授 山口好和

今年度の「知内ソーシャルクリニック」事業は、北海道知内高等学校（以下、知内高校）での探究型授業づくりコラボとそれを支える近隣機関、団体への聴き取りを中心に取り組んだ。同校の「地域創生学習」は生徒たちが地域を理解するための探究活動であるが、その中核は町内関係機関、事業所での「インターンシップ活動」と前後の調査活動からなる。高校生にとっては、社会理解、情報活用のトレーニング実践である一方、近隣の各事業所や公共機関にとっては高校生との対話機会を得る貴重な場にもなっている。コロナ禍で2学期からの開始を余儀なくされた昨年度とは違って、幸い今年度は4月から準備を進めることができた。

「地域創生学習」の単元は、大きく以下のフェーズで構成されている。まず冒頭部で町内を俯瞰するバスツアーを行う。次に町内各事業所の業務、実践の様子を知るためにゲスト講師との対話集会（同校では「ソクラテス・ミーティング」と呼ぶ）を開く。続いて、訪問先の業務、特色を調べて報告する「ポスターセッション」を経て、各事業所で終日実習活動（インターンシップ）に赴く。その後、年間を通じた学習経験と追加調査の成果をまとめて報告会を開く。その際の主題は知内町の将来展望を語る、というものである。

これらのうち今回は、6月初旬に実施した地域学習に関するガイダンスと町内一周のバスツアー、6月下旬の「ソクラテス・ミーティング」、そして10月中旬に実施された「ポスターセッション」とその振り返りの様子を簡単に紹介したい。

まず単元冒頭のガイダンスを「まちあるきを愉しむ」と称して、町内の古い地名や開墾当時の生活習慣など、地域理解の素材を確認しながら関心を喚起した。さらに学びの意欲を高めるべく、町外出身者にとっても大まかなイメージが描ける程度の主要な施設（小学校や交通機関・施設、大きめの事業所・建物など）を写真カードに印刷しておき、A1版の地図に貼り付ける活動を用意した。同時に、国土地理院が提供するWebGIS「地理院地図」の知内町カスタマイズ版を準備して、PC上の簡単な操作で実際の地理関係を確認できるようにした。この活動は、導入されて間もないノート型PCの活用機会を増やすという校内のニーズにも合致したため、生徒・教員双方から大歓迎された（写真1・2）。

ガイダンスの2日後、町内を一周するバスツアーに出かけた。昨年度と同じく見学先は「知内ダム」と「重内神社」である。その際、帰途を大回りして、町内の小学校や旧中心街、築港、発電所周辺を巡ってから高校へと戻ることにした。また各班にはデジタルカメラとタブレットPCを1台ずつ貸し出した。家庭生活ではほぼ全ての生徒がスマートフォン操作に習熟していると予想されるが、写真機を使用することで、訪問先の風景撮影がいわば〈学びの履歴〉として後に役立つことを自然と意識してほしいからである。結果的に全グループではないが、回り道した際の風景を記録した生徒たちが、ちらほら見られた。

6月下旬「ソクラテス・ミーティング」では、1年生

約50名を大きく2つに分け、各組4ブースに分かれたゲスト講師の説明をローテーションで聴講した。今年度はJA、漁業協同組合、温泉、町役場、森林組合、教育委員会(社会教育)、幼稚園、信用金庫の8か所からゲストを招き主要業務の紹介や資料解説がなされていた。開始から5年目を迎えて、どのゲスト講師も生徒との応答を重視した解説であった。

夏季にはコロナ対策に追われる不運もあったが、10月には無事「インターンシップ」を実施できることになった。その事前調査の報告会とも言える「ポスターセッション」が、10月中旬に実施された。今年度は知内中学校3年生が全員参加して、高校生と一緒に町内の情勢を学んでいた。報告内容が模造紙1枚に収められており、伝える練習の機会として落ち着いた場になっていた。中学生や同級生から付箋紙へのメモを通じて質問が寄せられ、翌々日の学習で各班がそれらメモの内容集約を図っていた。あえて課題点を挙げるなら、同一事業所を訪れる二組の生徒間に、情報共有の姿勢が乏しいことや、事業所や生産物の特色を拾ってはいるがその意味や経緯、圏域でのアドバンテージなどは語られていなかったことである(もちろん実習を通じてそれらを身体で納得するのが元来のインターンシップなので、この時点の生徒の報告が〈薄味〉なもの無理はない)。

今年度は、訪問する機関、事業所との連絡・調整を町役場の方に委ねることで、学校側の学習サポート体制が取りやすくなったとのことである。

同校の「地域創生学習」はどの年度においても、近隣との連携のあり方、校内での分担体制、教育内容・方法の工夫など「より最適な姿」を追い求めている。中学校教員やJA職員との懇談では、町内出身生徒の意欲的な活動を褒める声も聞かれる。高等学校・学習指導要領が次年度から本格実施を迎えることを考えれば、短期的に見た学習成果と中長期的な学びの意義のそれぞれを、生徒自身や教員、訪問先関係者の述懐を通じて共有する機会が必要になる。「インターンシップ」当日には、本学から記録用機材(写真機、ビデオカメラ)を各班に貸し出した。それらの情報も成果、意義を確かめる上での貴重な蓄えとなるはずである。生徒たちや先生方と振り返りの機会を設けて、次世代へバトンを繋ぎたい。

(付記) コロナ禍という逆風下で探究活動を進めておられる知内高校の先生方、ならびに各関係機関で実習にご協力頂いた方々に、この場をお借りして深くお礼申し上げます。

※補足1: 本稿執筆時点で「地域創生学習」が継続中である。12月以降は毎月2、3回の学習機会と個人調査を行い、3月前半にグループ別の発表会が開かれる予定である。

※補足2: 昨年度から今年度にかけての知内高校および知内SCでの取り組みを、「日本教育大学協会研究集会(第6分科会B)」(当番 福岡教育大学、10月2日開催)において「フィールド活動による高校生の地域理解～知内高校『地域創生学習』の事例をもとに～」として報告した。

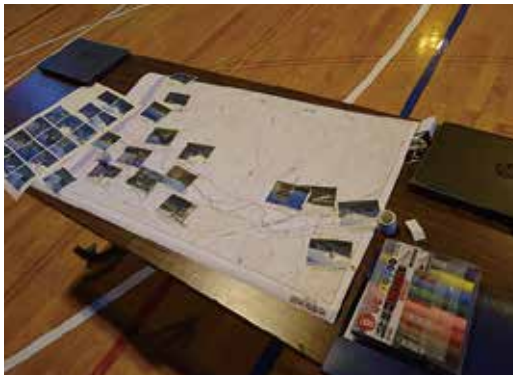


写真1 町内を俯瞰する地図と主要施設



写真2 デジタル地図をもとに話し合う生徒



写真3 重内神社の見学風景(生徒撮影)



写真4 バスから見る知内発電所(生徒撮影)



写真5 ゲスト講師の話に聴き入る生徒たち



写真6 中学生たちの前で発表する様子



写真7 報告の2日後に付箋紙の内容を集約